
通りゃんせ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
通りゃんせ

【Nコード】
N13770

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
横断歩道を歩いているといつも聴く曲。良子はその曲を聴く中でふとある子供を見た。その子供は。大阪を歩いているヒントを得た作品です。

第一章

通りゃんせ

「通りゃんせ、通りゃんせ」

大阪の街ではよくこの曲が聴かれる。

「ここは誰の細道じゃ」

「天神様の細道じゃ」

横断歩道を渡る時にいつも聴く。それがいつもだった。若多雨良子はいつもこの曲を聴いていた。そうしてだ。手を持っている母にだ。こう尋ねた。

「ねえお母さん」

「どうしたの？」

自分によく似ていると。いつも言う母に問うたのだ。

「何かあったの？」

「この曲だけれど」

青信号を渡りながらの言葉だった。

「何なの？」

「何なのって？」

「何か凄い不思議な曲よね」

母のその顔を見上げて言う。

「とても」

「不思議なの？」

「何かこの世にある曲じゃないみたい」

こう言うのである。

「何か」

「そう思うの？」

「細道を歩いていたら何かね」

そして言うのだった。

「そのまま何処かに行ってしまういそうになるけれど」

「そう思うんやね」

「ここでつい関西弁を出してしまった母だった。実は彼女は愛媛の方の生まれなので関西弁はまだ身に着いていないのである。しかしそれでも今は出たのだ。」

「良子ちゃんは」

「そやけどちやう？」

そして良子もだ。関西弁を出して言う。

「それは」

「確かに。何か不思議な曲やけれど」

「その細道を通ったらどうなるんやろ」

「このことをまた言う良子だった。」

「その時は」

「天神様の細道を通ったらその先には」

「その先には？」

「お母さんにもわからへんわ」

「完全に関西弁で言ってしまった。」

「それは」

「お母さんもわからへんの」

「御免な。それでな」

「それで？」

「今晚何食べる？」

話題を変えた。夕食にだ。

「晩御飯。何がええ？」

「お豆腐がええ」

良子はそれだというのだった。彼女の好物である。

「それとほうれん草」

「その二つでええのん？」

「うん。お豆腐とほうれん草って身体にええんやろ？」

「このことも母に対して尋ねる。言葉は何時の間にか完全に関西弁になっていた。それはその通りゃんせの曲を聴いているうちに自然

になつてしまつていたのだ。元々関西弁で話しているのは大阪だから当然だ。だがそれでもそれ以上にこの曲にはそうさせるものがあった。

「どっちも」

「そやで。じゃあそれにしようか」

「おやつは蜜柑がええけど」

「ええで。じゃあ蜜柑も買おうな」

「うん、晩御飯それで頂戴」

そんな話をしながら青信号の歩道を母に連れられて歩いた。

そしてであつた。次の日もその次の日も。歩道はその曲を聴きながら歩いた。そんなある日のことだ。またその曲を聴いて歩いていくと。

ふとだ。目の前の信号の向こうに誰かがいた。それは。

昔の子供が来ていた丈の短い着物を着た男の子だつた。草履を履いていてお面を被っている。それは白い狐のお面だつた。

「狐？」

良子はそのお面を見て言った。

「どうして狐のお面を被つてるの？」

だが男の子は答えない。そして何も答えないまま静かに姿を消してだ。後には誰もいなかった。

「あれっ？」

姿を消した。良子は首を傾げさせた。誰もいなかったのだ。

第二章

それでいぶかしんでいるとだった。母が彼女に尋ねてきた。

「どうしたの？」

「人がいたの」

こつ母に答える。男の子がいた向こつ側を指差してだ。

「男の子が」

「男の子が？」

「けれど今はいないの」

首を傾げさせながらの言葉だった。

「どうしてかしら」

「見間違いじゃないの？」

「見間違いかしら」

「よくあることよ。いたと思ったらいないのよ」

穏やかに笑って母は話す。

「そういうものなのよ」

「そうなの」

「そうよ。見間違いはよくあるわ」

優しい声で娘に話す母だった。

「気にしないことね」

「うん、じゃあ」

この日はこれで終わった。だが数日後だ。歩道を歩いている時にまた出て来たのだった。また向こつ側にあの男の子がいた。

「また」

そしてだ。また声をかけた。しかしであった。

「ねえ、誰なの？」

こつ男の子に尋ねた。

「貴方誰なの？」

しかし男の子はここでも答えない。そしてまた無言で立ち去りだ。

そうして姿を消すのだった。

この時は手を持っている母には何も言わなかった。見間違いかと思っただからである。それでいぶかしんだままでその母に連れられて帰ったのだった。

そうしたことがまたあった。良子には何が何なのか全くわからなかった。どうして信号の向こう、あの曲が聴こえると男の子が出て来るのか。それがわからなかった。

このことを信号を見る度に考えるようになった。暫くその曲を聴きながら横断歩道を渡っても男の子は出なかった。しかしであった。この日はまた出て来た。やはり向こう側に立っていた。

「またいた」

その男の子を見て呟いた。

「今日は会えたけれど」

それでだ。この日も声をかけた。するとだった。

不意に周りが白くなった。道は消え何もかもが白く光る中に出てだ。そうしてであった。

「通りゃんせ、通りゃんせ」

「ここは誰の細道じゃ」

「天神様の細道や」

あの曲が聴こえてきた。気付けば良子は一人だった。

母はいない。咄嗟に周りを見回してもだ。白い光の中に自分だけいるだけでだ。そうしてそこにいるのは誰もいなかったのである。

「あれ、お母さん？」

見回してもいない。本当に一人だった。

「何処に行ったの？」

「いないよ」

「ここにはいないよ」

そしてだった。周りから声が聞こえてきた。

「いるのは僕達だよ」

「僕達だけだよ」

見ればだ。目の前にあの男の子がいた。やはり白い狐のお面を被っている。

そして他にもいた。赤い着物でおかつぱの、狸のお面の女の子い丸坊主なのはわかるがその顔にひよつとこのお面を被った小坊主、その他の子供達もだ。皆着物を着ていてそれぞれ河童や童のお面を被っている。その子供達が良子の周りにいたのだ。

第三章

その子達がだ。良子に対して言ってきた。

「ねえ、良子ちゃん」

「良子ちゃんだよね」

「私の名前知ってるん？」

「うん、知ってるよ」

「ちゃんとね」

「こっ返答が返って来た。

「会っていたからね」

あの狐のお面の男の子が言ってきた。

「だからね」

「だからなの」

「そう、二回ね」

「二回も」

「二回も会っていたんや」

「そうやったんだ」

周りの子供達が二人の話を聞いて述べる。

「そんなに会っていたんや」

「縁があるんやね」

「そうだよ。けれどね」

「ここでまた話す周りだった。

「あんたはここにいたらあかんよ」

「ずっといたらあかんよ」

「絶対にね」

「絶対につて？」

「ここは生きてて入る世界やないで」

「そっやないんやで」

だからだというのである。

「ずっと後から来る世界やから」

「まだあかんで」

「まだって？」

「道には気をつけるんやで」

「お母さんの手をしっかりと持ってな」

周りの子供達はまた良子に話してきた。

「それで離れたらあかんで」

「何があってもやで」

「何があってもやの」

「そう、まだこっちに来たらあかんで」

「そやからな」

「手を離したらあかんで」

周りの子供達は良子の正面にいるその狐のお面の男の子を中心としてだ。それぞれ手をつなぎ合ったうえだ。言ってくるのであった。

第四章

「それだけ守ってな」

「御願いやで」

「約束してくれる？」

狐のお面の男の子の言葉だった。

「このこと」

「約束？」

「そう、約束」

こう言うのだった。

「約束してくれるかな、このこと」

「うん」

そしてであった。良子もそれに頷くのだった。

「そやったら。約束するわ」

「それやったらええで」

「頼んだで、絶対にやで」

「お母さんの手を握ってるんやで」

狐のお面の男の子だけでなくだ。周りもまた行ってきた。

「しっかりとね」

「あんじょうやで」

こう話してだ。子供達はやがてその手をつないだまま良子の周りを時計回りに回りだした。そうしてそのうえでまたあの歌を歌うのだった。

「通りゃんせ通りゃんせ」

「ここは誰の細道じゃ」

「天神様の細道じゃ」

白く光るその世界の中で歌っていた。良子はその輪の中にいた。

そして気付くとだった。歩道の真ん中にいた。隣に母がいた。

「良子？」

「えっ？」

「どうしたんや」

その母は少し驚いた顔で良子に言ってきていた。

「急に立ち止まって」

「あっ、私別に」

「行くで。ええな」

「うん、そやったら」

母の言葉に頷いてだ。そして。

その手を握ってだ。そのうえで言うのだった。

「い」

「うん、行くで」

母もまた良子に対して言う。

「今からな」

「ねえお母さん」

良子はその白い中で子供達に言われたことを思い出してだ。自分からも握り返してくれた母に対して言うのだった。彼女の方からもだ。

「手やけど」

「手がどないしたん？」

「ずっと持っててええ？」

その母の手を握りながらの言葉である。

「ずっと。ええかな」

「ええよ」

母はそれが当然といったように言葉を返した。

「というか絶対に離したらあかんで」

「離したらあかんの？」

「車にはねられたり悪い人にさらわれたらどないするんだからだというのである。

「そやる。だから離したらあかんで」

「そやから」

「そうや。絶対に離したらあかんで」

また言う母だった。優しい顔で。

「絶対にな」

「わかったわ。そやったら」

「いこか」

優しい顔のままでの言葉だった。

「今からな」

「うん、じゃあ」

こうしてだった。良子は母の手を持ったまま歩道を渡る。その渡
る中でまたあの曲が聴こえた。

「通りゃんせ通りゃんせ」

「ここは誰の細道じゃ」

「天神様の細道じゃ」

この曲を聴きながら歩道を歩くのだった。母の手を握ったまま。
今はもうあの男の子も子供達もない。しかしそれでも彼等の言葉
と曲は忘れられなかった。

通りゃんせ 完

2010・5・28

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1377o/>

通りゃんせ

2010年10月8日12時12分発行